

中国の食糧需給

国際領域上席主任研究官 河原昌一郎

1. はじめに

中国は言うまでもなく世界最大の食糧生産・消費国です。中国の食糧生産量は世界生産量の約2割を占めており、その食糧需給の動向が世界の食糧価格や需給にも大きな影響を与えることは言うまでもありません。とりわけ、近年では、経済の急速な拡大とともに、世界の穀物市場への影響力も増しており、その需給動向が一層注目されるようになっていきます。

それでは、中国の現実の食糧需給の動向はどうなっているのでしょうか。中国の食糧生産量は、市場の動向だけでなく、中国政府の実施する食糧政策によって大きな影響を受けています。そこで、本稿では、まず中国でどのような食糧政策が実施されているのかを明らかにし、その上で、食糧の需給動向および今後の課題について述べることにします。

2. 中国の食糧政策

1999年以前に中国が実施していた食糧政策は供給過剰となって市場価格が下落しても政府が余剰食糧をすべてあらかじめ定めた保護価格で買い上げるといった保護価格政策でした。保護価格政策期には、食糧の価格および流通とも実質的に政府の統制下であり、また、市場実勢価格よりも高い価格で買い上げる保護価格政策は、必然的に過剰生産を招き、在庫が積み増しされ、政府の財政負担も大きく膨らんでいました。

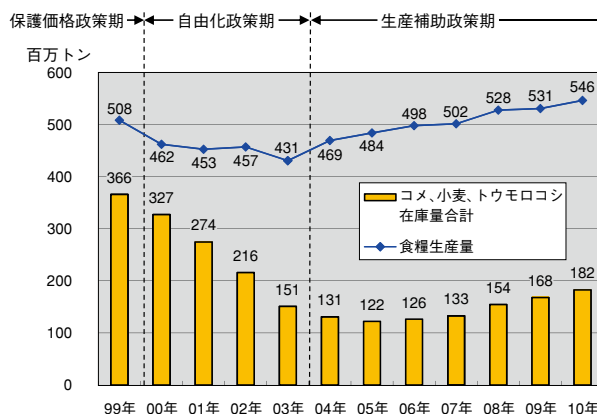
こうした情勢に対応して、財政負担の軽減を図り、2001年末に予定されたWTO加盟をにらんで価格、品質等での国際競争を意識した自由化政策が2000年から実施されます。自由化政策では、保護価格制度が廃止されて価格が自由化され、また、国有食糧企業しか行えなかった食糧流通業に自由な参入が認められることとなって、流通も自由化されます。併せて、競争力強化のため優良品種の導入等による食糧主産地の育成が図られました。

しかしながら、こうした自由化政策によって、積み増しされていた膨大な在庫圧力が背景となって食糧価格は大きく下落します。このため、農家の食糧生産意欲が冷え込み、自由化政策期には食糧生産量が低迷するようになります。

第1図は、1999年以降の食糧生産量、在庫量を示したのですが、同図のとおり、2000年以降食糧生産量は1999年と比較して約5千万トンも減少し、国

内生産量が需要量に満たなくなったことから在庫の取り崩しが進みました。特に、2003年の食糧生産量の水準が近年にない低い水準に落ち込んだことから、政府は食糧需給に対する危機意識を強めることとなりました。

このような事情を背景に、2004年から食糧増産を主な目的とした新しい食糧政策が実施されます。この新しい政策は、第2図のとおり、自由化政策期における市場による価格形成および主産地育成という基本的枠組は維持した上で、食糧生産農家に補助金を支出して食糧生産の維持・増産を図るとともに、食糧価格・需給の安定を図るために国家備蓄や最低



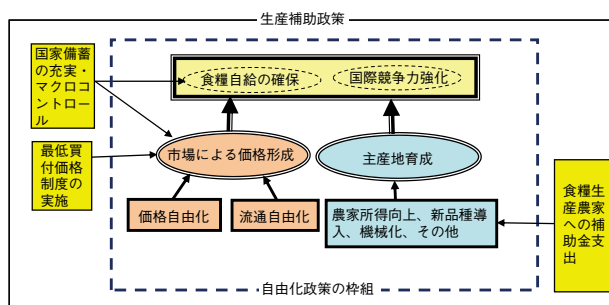
第1図 中国食糧生産、在庫量の推移と食糧政策時期区分

資料：中国農業発展報告2010、中国国家统计局、USDA Foreign Agricultural Service.

注(1) 食糧生産量は、穀物、豆類およびイモ類(重量の5分の1)の合計量。

(2) 2010年の在庫量は見込み。

(3) コメはもみ米ベース。



第2図 生産補助政策期の農業政策

資料：筆者作成。

買付価格制度（市場価格下落時に市場から最低価格で買い上げる制度）を実施するというものです。

農家への生産補助金支出は、中国では従来になかった画期的な施策であり、食糧増産の主要な政策手段となっていますので、この新しい政策を生産補助政策と呼ぶこととします。なお、生産補助政策は自由化政策の枠組の上に実施されているもので、保護価格政策期におけるような自由化以前の状況に戻ろうとするものではありません。

この生産補助政策の実施によって、第1図のとおり、中国の食糧生産量は2004年以降毎年増産を続けており、在庫量も安定的に推移するようになっていきます。

3. 食糧需給の動向

生産補助政策の効果もあって、中国の全体としての食糧需給は近年ではほぼ均衡して推移していますが、そうした状況は今後とも維持されるのでしょうか。

第3図はコメ、小麦およびトウモロコシの生産、消費量の推移を示したものです。生産量は細線で、消費量は太線で示してあります。いずれの品目も自由化政策期は生産が落ち込み、生産量が消費量に満たない状況でしたが、生産補助政策期になると需給はほぼ均衡し、生産量が消費量をやや上回る状況となっています。

しかしながら、ここで注目すべきはトウモロコシの消費量の動向です。コメと小麦の消費量の動向は近年ではほぼ横ばいとなっているのに対して、トウモロコシの消費量は一貫して拡大を続け、1999年から2010年までに4千万トン以上も増加しています。これは中国でも経済成長に伴って、畜産物、酪農品の消費が増え、飼料需要が増加しているからにほかなりません。第1表のとおり、中国の食糧消費における飼料用消費の比率は2020年には41パーセントとなり、消費者直接消費量とほとんど変わらない量になるものと予測されています。それに応じて、トウモロコシの消費量の拡大は今後とも続くこととなります。

すなわち、コメおよび小麦については、現在の生産量が維持されれば需給の均衡を崩すことはありませんが、トウモロコシについては、飼料需要の拡大に応じて今後とも生産量を増加させていかなければ、需給ギャップを生じさせることとなります。今日の中国の食糧需給の問題は、すなわち飼料問題なのです。

4. 今後の課題

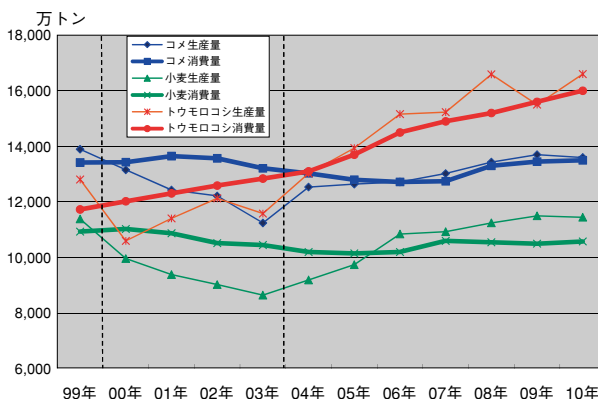
このような状況に対応して、中国は食糧需給政策の基本として、2020年までに5千万トンのトウモロコシの増産を図ることとしています。

増産のために農家の食糧生産意欲の向上等による単収増加（2010年の1ムー当たり325キログラムを2020年に350キログラムに）がめざされていますが、その主要な政策手段は農家への補助金支出です。補助金支出額は2004年以来毎年大幅に増額されてきましたが、最近伸び率が落ちています。政府の財政負担には当然ながら限度があり、補助金支出に頼った増産政策が今後とも十分な効果を上げ得るかどうかには疑問があります。

また、中国政府は、今後、厳格な転用規制を行うことによって耕地面積の減少を防止するとしていますが、旺盛な土地開発需要によって現実には建設用地転用には歯止めがかかっておらず、最近では増加の傾向すら見られます。吉林省での5百万トン増産計画も立てられていますが全国レベルで自給に必要な耕地面積の維持は容易ではありません。

トウモロコシは、かつてはかなりの輸出余力があったのですが、この4～5年は国内需要の増加によって輸出がなくなり、わずかですが輸入も見られるようになっていきます。

中国は、ほぼ完全な食糧自給を食糧政策の基本としていますが、その実現は必ずしも容易なものではなく、予断を許さない状況と言うほかはないでしょう。



第3図 コメ、小麦、トウモロコシの生産・消費量の推移

資料：USDA Foreign Agricultural Service.

注（1）2010年は見込み。

（2）コメは精米ベース。

（3）図中の点線は第1図の食糧政策の時期区分を示したものの。

第1表 中国の食糧消費構成の変化

	1995年		2005年		2020年（予測）	
	消費量(万トン)	構成比	消費量(万トン)	構成比	消費量(万トン)	構成比
消費者直接消費	27,427	61%	27,107	55%	24,750	43%
飼料用消費	12,913	28%	15,818	32%	23,550	41%
工業用消費	3,800	8%	5,335	11%	9,258	16%
種子用消費	1,320	3%	1,180	2%		
計	45,460	100%	49,440	100%	57,558	100%

資料：謝顔、李文明「從消費需求角度探索保証我国糧食安全的新途徑」『中国糧食經濟』2010年第5期24～26頁から整理。